

## 2014（平成26）年度エリザベト音楽大学大学院の

### 博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条およびエリザベト音楽大学学位規程第12条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏名	小林知世		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	甲第15号		
学位授与年月日	平成27年2月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	パウル・ヴィットゲンシュタイン《左手のためのピアノ教則本》の研究		
学位論文等審査委員			
(総合審査) 委員長	教授	柿本因子	
	教授	片桐 功	
	教授	柴田美穂	
(演奏審査) 委員長	教授	柴田美穂	
	教授	片桐 功	
	教授	柿本因子	
	名誉教授	佐藤恭子	
	名誉教授	廣澤久美子	
(論文審査) 委員長	教授	片桐 功	
	教授	柿本因子	
	教授	柴田美穂	

### 論文内容の要旨

鍵盤楽器を奏する者にとって、ピアノを両手で奏するという行為は当たり前のこととして特に意識することはない。しかし、19世紀に入るとピアノの改良や、より技巧的な作品の増加、日々のけがや世界大戦などによる右手の負傷などにより、左手のための作品が爆発的に増加した。近年ではアメリカのレオン・フライシャー、カナダのラウル・ソーサ、そして日本の舘野泉など、右手が不自由になることによって、左手のピアニストとして再起した演奏家達が世界中で見受けられるようになったが、左手のための作品が生まれる経緯を辿っていく中で、特筆すべき人物として、オーストリアの左手のピアニスト、パウル・ヴィットゲンシュタインが挙げられる。右手を損失した後、あらゆる作曲家への左手のための作品委嘱活動と自身の演奏活動によって、左手のための作品は広く普及し、大きく発展することとなった。とりわけ、彼の残した教則本は、自身が左手のためのピアニストになるために用いたトレーニングだとされる

ため、演奏者の立場で実践することによって、この教則本にみられる彼の特徴を明らかにしたい、と考えた。彼の全3冊に及ぶ教則本についての研究は、ほとんどないため、彼の教則本から読み取れる彼の編曲技法と演奏技法について、より具体的に見ていく作業を進めた。

第1章ではヴィットゲンシュタインに至るまでの左手のための作品をいくつか挙げ、どのような要因から生まれ、その後発展を遂げてきたかを明らかにした。

第2章では、ヴィットゲンシュタインの生涯と音楽活動に焦点をあて、生涯年表を作成した。頑固で気難しい彼の性格は、時に対人関係、特に作曲家とのやりとりなどにおいて妨げとなったほか、ピアニストとしての評価においても、時として芳しくないものが多々あり、それらが彼の死後の評価を下げた要因と言える。しかし、その音楽に対する彼の不屈の精神と情熱無くしては、今日の左手作品の発展、とりわけ左手のピアノとのアンサンブル作品における発展を見ることはできなかつたろう。

第3章では、ヴィットゲンシュタイン唯一の著書《左手のためのピアノ教則本》全3冊について、詳細に検討した。訓練集、練習曲集、編曲集とに分かれた教則本はたぐい稀なものである。

第1巻では100通りを超える技術課題があり、ハ音を中心にして発展していく伝統的な教則本の在り方だが、冒頭から課される指の伸縮や跳躍のパターンの複雑さ、特殊な指使いや通常では用いられない指の交差、そして大部分の訓練を全調に移調するよう指示している点など、これまで出版されてきた他の訓練集より幾倍も高い難易度を要求するものであった。実際に実行されるならば相当の左手の技術を会得できる教則本だと言えることができる。しかし、ペダリングについては非常に音がにごる指示も多く、ハーフペダルや踏み換えなどを推奨するものについては本文で指摘した。

第2巻練習曲集では小節数、調性と速度表記、原曲の種類、目的とする技術、技術的難易度に注目し考察した。ある特定の技術を反復することによって左手の技術の向上を目的として書かれており、短いもので4小節など曲の一部を取り上げたものが大部分を占め、演奏会用の曲としては成り立っておらず、あくまで訓練的な要素を持ったものであった。ゆったりとした作品から速い作品まで取り上げており、技術的難易度においても、低いものから高いものまで幅広い。第2巻で取り上げる技術の要素は、必ずしも第1巻の訓練を用いたものではなく、新たな技術要素が加わっていたため、第2巻は第1巻の延長線上に位置づけられ、第3巻の予備訓練に該当しているものとして、繋がるものと考えられた。

第3巻編曲集でも第2巻と同様に考察した。原曲とほぼ同じ長さで、大部分が小品に止まるものの、演奏会でも取り上げることが可能なものであった。彼の編曲技法の特徴として、低音(一番下のAやH)が多く付加されていること、旋律声部が原曲に忠実であることから原曲とさほどの違いはなく、同一作品による他人の編曲法と比べると、特徴ある独自性を見出すことはできない。しかし、編曲集のそれぞれの作品に書き込まれた速度表記や細かい強弱、指使い、フレーズやアクセント、アゴーギクやペダルにおける指示は、ヴィットゲンシュタインが左手のピアニストとして、当時どのように解釈し演奏したかという記録であり、彼の左手のピアノ奏法に対する研究の成果が見てとれる。この3冊の教則本について、自身による訂正をはじめ、ペダルや音価の曖昧さ、教則本としての音や記号のミスは多く、完全版として出版するには更なる改訂が必要である。

第4章では、教則本を比較検討するために、指の訓練集と練習曲集の2つを合わせた教則本としてヴィットゲンシュタインに至るH. ベーレンス、F. ボナミーチ、Is. フィリップによる、左手のための教則本についてそれぞれの内容を考察した。ある一定の音型の区切れ(1セクション内)の最大音域と腕のポジション移動、指の交差の有無において考察した結果、ベーレンスの訓練集、フィリップの訓練集は比較的易しく数も少なかったのに対し、ボナミーチの訓練集(作品271)とヴィットゲンシュタインの訓練集は数や種類が膨大で、かつ多声的な訓練も要求

していたため、技術的難易度が高いものと判断することができた。さらに後者2つのものを見ると、指を交差する度合いや腕のポジション移動、技術的難易度の面において、ヴィットゲンシュタインの訓練集は、ボナミーチのものには取り上げられていない複雑な訓練も課していることから、この中で技術的難易度の高い訓練だということが明らかとなった。

練習曲集では、これまでの比較対象に加え使用音域についても考察し、その使用音域について平均をグラフにしてあらわしたところ、総合的にベーレンスの練習曲が一番狭く、フィリップ、ボナミーチと続き、ヴィットゲンシュタインのものが、より広い音域を使用し、指や腕の素早いポジション移動が求められ、より難しいものと判断することができた。

以上の分析結果を踏まえ、以下のような結論が得られた。まず教則本の第1巻は、日々の練習として取り入れるにはあまりに技術的難易度が高く超人的なものであり、特筆すべきものであった。次に第2巻と第3巻は、第1巻で取り上げられた技術を適用したものはわずかで、とりわけ第2巻では演奏会用の楽曲として成立しておらず、第3巻では小品ばかりで全体的に曲としての面白みにかける点は演奏していても明らかであった。さらに作曲家としての技量の限界、また演奏家としての技量を披露したい願望がきっかけとなり、彼は左手のためのピアノ作品という新たなジャンルを切り開き、発展させていったと思われる。

## 審査結果の要旨

### 1. 演奏審査

88 鍵あるピアノを「左手のみ」で演奏することは至難の業であるが、現在も、手の故障、病気などにより、止む無く左手のみで演奏活動が続いているピアニストは多数おられる。戦争で負傷しながらもピアニストとして活躍しつつ左手のための大事なレパートリー作りに多大な貢献をしたヴィットゲンシュタインに注目し、その研究を進めてきたのが小林知世さんである。

博士後期課程在学中の3回のリサイタルでは、ヴィットゲンシュタイン《左手のためのピアノ教則本》所収の楽曲、ブラームスによるウェーバーやバッハの左手訓練用編曲など、左手を取り巻く数々の作曲家の編曲作品を取り上げ、左手のみと右手とのテクニックの違いに注目しつつ、多角的に研究を進めてきた。

最終リサイタルである今回は、「P. ヴィットゲンシュタインと彼にまつわる作品」と題して、次のような演奏を行ったが、とても意欲的なプログラムで、構成としてもよかった。

- P. ヴィットゲンシュタイン：ヴァーグナー＝リストによるイゾルデの愛の死  
M. ラヴェル：左手のための協奏曲（2台のピアノ編）  
Fr. シュミット：左手のピアノ、2つのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための五重奏曲

1 曲目の「イゾルデの愛の死」では、オペラの歌やオーケストラの音色を表現するために、もう少し効果的な響かせ方を工夫できれば、より表現の幅が広げられたのでは、と思われるが、やはり編曲自体に無理があり、いみじくもヴィットゲンシュタインの編曲能力の限界を感じさせることとなった。

2 曲目のラヴェルは北林聖子氏のピアノ伴奏により演奏された。もう一息フレーズの大きさ、色彩感などの点で、改良の余地はあったが、聴きごたえのある演奏であった。

3 曲目のシュミットは山根啓太郎氏、福原里奈氏、竹馬洋美氏、熊沢雅樹氏のご協力のもと真摯な取り組みの成果として演奏されたが、5 人の奏者の掛け合いも素晴らしく、アンサンブルピアニストとしての力量も存分に感じられた。

両手で演奏する場合でも、ピアニストにとっては左手の重要性は大きい。今後、更に研究を続け、左手の可能性を証明していってくれることと期待している。

## 2. 論文審査

本研究は左手のためのピアノ作品を論じたもので、とりわけ左手のピアニストとしてその草分けの一人であるパウル・ヴィットゲンシュタインの書いた全3巻からなる《左手のためのピアノ教則本》に焦点を絞って研究したものである。左手のピアノ作品については近年知られるようになってきたが、その研究はまだ始まったばかりであり、ヴィットゲンシュタインの教則本について書かれた先行研究も博士論文が1点あるのみで、本格的な研究が待たれる状況にあった。その意味で本研究には十分な意義が認められる。小林さんは訓練集(第1巻)、練習曲集(第2巻)、編曲集(第3巻)に分かれたこの教則本を各々詳細に検討しながら、その訓練過程、編曲技法、難易度等について考察し、さらにこの教則本のもつ特徴を左手のための作品の歴史の中で位置づけるために、彼以前の3人(ヘルマン・ベーレンス、フェルディナンド・ボナミーチ、イジドール・フィリップ)の教則本との比較検討も行っている。

その結果、ヴィットゲンシュタインの教則本は一番使用音域が広く、技術的難易度も高いものであることが判明したが、彼には作曲家としての技量の限界があり、そのことを彼自身感じてもいたし、また演奏家として自身の技量を披露したい気持ちもあって、莫大な財力を払って様々な作曲家に左手作品を委嘱していったのではないかと、ということを鮮やかに描き出した。

こうした彼女の研究は実際に楽譜を音にしながら進めているので、楽譜のミスを何か所も発見したり、楽譜に記載されているものよりももっと最適な指使いも提唱しているし、訓練集(第1巻)をとりわけ重視して詳細に検討を重ねた点では先行研究をはるかに超えており、高く評価できる。教則本の定義が曖昧であったとの指摘や、まとめの中に実際に演奏してみても運指、アーティキュレーション、アゴーギク、ペダリング等について感じたものにも触れてほしかったとの意見や、今後左手のもっている可能性についてさらに研究を深めてほしいとの要望もあったが、審査委員会としてはこの論文が今後この分野を研究しようとするものに大いに役立つことは疑いなく、また彼女は博士後期課程在学中に3回実施されたリサイタルでも左手のためのピアノ作品を取り上げて実践面からも考察を深めてきたことから、もう十分であろうとの判断に至った。

## 3. 総合審査

以上の演奏審査と論文審査を総合判断し、この研究は今後この分野を研究しようとするものに十分寄与するであろうことから、全員一致で「博士(音楽) Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。